

【テキスト中に現れる記号について】

≡…ルビ

(例) 拳こぶし

—…ルビの付く文字列の始まりを特定する記号

(例) 一二尺掠り除かすれて

「#」…入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定

(数字は、JIS X 0213の面区点番号、または

は底本のページと行数)

(例) ※

水 / 水 (水十水、第2水準1-05-05)

…返り点

(例) 汝所居山、

人間も四つ五つのこどもの時分には草木のたたずまいを眺めて、あれがおのれに盾突くものと思いい、小さい拳こぶしを振り上げて争う様子をみせることがある。ときとしては眺めているうちこどもはむこうの草木に気持を移らせ、風に揺ぐ枝葉と一つに、われを忘れてゆららに身体を弾ませていることがある。いずれにしる稚純な心には非情有情の界を越え、彼ひと此この区別を無なみする単直なものが残っているであろう。

天地もまだ若く、人間もまだ稚純な時代であった。自然と人とは、時には獐猛じやうもうに闘い、時には肉親のように睦むつび合った。けれどもその闘うにしる睦ぶにしる両者の間には冥通する何物かがあった。自然と人とは互に冥通する何者かを失うことなしに或は争い或は親しんだ。

ここに山を愛し、山に冥通するがゆえに、山の祖神おやのかみと呼ぶる翁おきながあった。西国に住んでいた。

平地へいぢに突兀とつとつとして盛り上る土積。山。翁は手を翳かざして眺める。翁は須臾しゆゆにして精神のみか肉体までも盛り上る土堆と閑聯した生理的感覚を覚える。わが肉体が大地となって延長し、在るべき凸所に必定在る凸所として、山に健やけきわが肉体の一

部の發育をみた。

翁は、時には、手を長くさし出して地平の線に指尖を擬する。地平の線には立木の林が陽を享けて薄すすきの群れのように光っている。翁は地平の小さな端から、擬した指尖を徐おもむろに目途めじの正面へと撫なで移して行く。そこに距離の間隔はあれども無きが如く、翁の擬して撫で来る指の腹に地平の林は皮膚のうぶ毛のように触れられた。いつまでも平たいらの続く地平線を撫で移って行く感覚は退屈なものである。人間の翁がそう感ずると等しく、自然自体も感ずるのであるうか、翁の指尖が目途の正面を越して反対側へ撫で移るまもないところから地平は隆起し、麓ふもとから中腹にさしかかり、ついに聳そびえ立つ峯巒ほうらんとなる。遠方から翁の指尖はこつに嵌はまったその飛躍の線に沿うて撫で移って行くと音楽のような楽しいリズムを指の腹に感ずる。地の高まりというものは何と心を昂揚さすものであるう。人を悠久に飽かしめない感動点として山は天地間に造られているのであろう。

火の端はたで翁は、つれづれであった。翁は腕を動かして自分の肉体の凸所を撫でまわす。肩尖、膝頭、臀部、あたま——翁の眼中、一々、その凸所の形に似通う山の姿が触覚より視覚へ通じ影像となつて浮んで来た。

山処やまぢの

ひと本すゝぎ

朝雨あさあめの

狭霧さきりに将起たんにぞ

翁は身体を撫でながら愛に絶えないような声調で、微吟した。

山又山の峯の重なりを望むときの翁は、何となく焦慮を感じた。対象するものあまりに豊量なのに惑喜させられたからだだった。翁は掌を裏返しに脇腹を焦じれたそうに搔いた。

峯々に雲がかかっているときは、翁は憂うれたげな眼を伏せてはまた開いて眺めた。藍墨の曇りの掃毛はけ目の見える大空から雲は剥はれてまくれ立った。灰いろと葡萄ぶどういろの二流れの雲は峯々を絡み、うずめ、解けて棚引く。峯々の雲は日のある空へ棚引いては消え去る。消え去るあとからあとから、藍墨の掃毛目の空は剥離して雲を供給する。峯はいつまで経つても憂愁の纏流てんりゅうから免れ得ないようである。それを見ている翁は、心中それほどの苦悩もないのだが、眼だけでも峯の愁いに義理を感じ

て、憂げに伏せてはまた開くのであった。そのうち翁は眼が怠くなつて草原へごろりと臥てしまつた。雲の去来は翁の眠っている暇にも続けられていた。だが、やがて雲は流れ尽き、峯は胸から下界へ向けて虹をかけ渡していった。

西国にて知れる限りの山々を翁はみな自分の分身のように感じられた。翁は山々を愛するがゆえに、それ等の山々の美醜長短を、人間の性格才能のように感じ取つた。事実、山には一目見ただけでも傲慢であつたり、独りよがりのお人好しであつたりしそんな性格に見立てられるものがある。

翁がみるところによると、どの山の性格でも翁自身の性格の中に無い性格はなかった。中には自分に潜んでいて、却つて山に現れ出て、逆に自分に気付かせられるようなこともあつた。翁は山を愛するが、しかし山を惧れ、そして最後に山を信じた。

翁は妻との間にたくさん子どもを生んだ。子どもが生れて一人動きできるようになると、翁はこれを山に持つて行つて置いて来た。

山の麓に子どもを置き去りにして来て、果してそれで育つものかどうか危ぶまれた。しかしどこへ置いたところでその幸のないものは、育つた方が却つて面白からぬことになるような育ち上りをしてしまふかも知れない。それなら一つそ、子どもを好きな山に賭けよう。山が育つべく思うほどの子どもなら山は育てよう。少くともこれほど信頼する山が悪しゆうは取計う筈はあるまい。もしこの上にして育たぬようだったら、山よ、わたしは諦める。だが、山よ、出来得べくはなる丈け育てて呉れ。翁は子どもを山の方に捧げ、ひよこひよこひよこ三つお叩頭をして、置いて帰つた。愛別離苦の悲しみと偉大なものに生命を賭ける壮烈な想いで翁の腸は一ねじり振れた。子どもを山にかずける度びに翁の腹にできたはらわたの捻纏は、だんだん溜つて翁の腹を縲の貝の形に張り膨らめた。それに腹の皮を引攀られ翁はいつも胸から上をえび蔓のように撓めて歩いた。

子どもの中には餓え死んだり、獣の餌になるものもあつたが、大体は木の実を拾つて食い、熊、狼の害を木の股、洞穴に避けて育つた。山は害敵とそれを免れるものと両方を備え無言にして生命それ自ら護るべき慧智を啓発した。子どもたちは父親の翁に似て山が好きだった。

その性分の上にあけ暮れ馴染む山は、はじめは養いの親であり、次には師であり、年頃になれば睦ぶ配偶でもあつた。老年には生みの子とも見做される情愛が繋がれた。死ぬときには山はそのまま墓でもあつた。しかし、生涯、山に親しみ山に冥通する何ものかを得た子どもたちは、老年に及び死を迎えるまえに生命を自然の現象に置き換える術を学び得ていた。彼等は死の来る一息まえ、わがいのちを山の石、峯の雲に托した。それゆえ彼等は悠久に山と共に鎮り、峯に纏つて哀愛の情を叙することができる。

翁はその多くの子どもを西国の名だたる山に、ほぼ間配りつけた。比叡、愛宕、葛城、鈴鹿、大江山——当時はその名さえ無かつたのだが、便利のため後世の名で呼んで置く——山ほどの山で翁の子どもは棲付かぬ山もなかつた。

山に冥通を得た子どもたちは、意識に於て「妙」というほどの自在を得た。離れたときには山と自分と相對した二つとなり、融ずるときには自分と山となし、或は山を自分とする一致ができた。山におのおの特殊の性格があることは前の条で説いた。子どもたちは育つた山の性その如き人間となつた。身体つき容貌まで何やら山の姿、峯の佛に似通つて見えた。西国の山は冬は脱ぎ夏は緑を装つた。子どもたちも亦冬は裸に夏は藤ごろもを着た。緑の葉に混る藤の花房が風にゆらいで着ものから紫の雫を撥ねさした。

もとより山のことにかけては何事でも暗んじている子どもを、麓の土民たちはその山の神と呼んだ。そして侍き崇むる外に山に就ての知識を授けて貰つた。たつきの業を山からかずけられて生活する麓の土民は、山の秘密や消息を苦もなく明す人間を、感謝し、惧れ、また親しんだ。ときどきは神祕に属する無理な人間の願事をも土民は子どもに山へ取次ぐよう頼んだ。子どもは苦笑しながら、しかし引受けた。冥通の力によつて山に土民たちの望むことを聴き容れさしてやつた。土民たちは助つた。

山の祖神の翁は西国の山々へはほとんど子どもを間配り終り、その山々の神としての成長をも見届けた。いまは望むこともないように思われた。ただ東国に目立つた二つの山があつて神々を欠くという噂を聞いていた。それは、どんな容貌性格の山だろうか、その性格は自分如きには無い性格

の山だろるか。まだ見ぬ東国の山は翁に取って、いま、一層に、慕わしいものとなった。それへも骨肉を分けて血の縁を結んだなら自分の性格の複雑さも増す思いで、分身を雲の彼方にも遺す思いで、自分はどのようにかこの世に足り足りいつつ眼が瞑れることだろう。翁に、末のこどもの姉と弟があった。深く寵愛していたのでまだどの山へも送らず、手元で養っていたのであるが、翁はどうとう決心した。翁は姉と弟を取って東路へ帰る旅人の手に渡した。翁は眷属の繁栄のため、そのおもい子を遥なるまだ見ぬ山の麓へおもい捨てた。

自然に冥通の人間の上に、自然が支配する時間の爪の搔き立て方は人間から緩急調節できた。翁の上に幾たびかの春秋が過ぎた。けれども、翁の齢の老に老の重なるしるらしいものは見えなかった。翁は相変わらず螺の腹にえび蔓の背をしてこそおれ、達者で、あさけ夕風には戸外へ出て、山々の方を眺めた。そして心の中で、わが眷属は、分身は、性格の一面は、と想った。想う刹那に、山々の方から健在のしるしの応答えが翁の胸をときめかすことよって受取られた。翁は手をその方へ掲げて、彼等を祝福した。

ただ東国の方へ遺った、まだ見ぬ山に棲める筈の姉と弟の方からは、翁のこれほどの血の愛の合図をもつてしても何の感応道交も無かった。翁は白い眉を憂げに潜め
「除汝、除汝、はや」

そういつて力なく戸の中に戻った。

空間といえども自然の支配下のものである。自然に冥通を得た翁の、僅にあずまと離れた空間の隔りに在る二人のいとし子に冥通の懸橋をさし懸けられぬいわれはなかった。だが翁の心に於て、まず最初に、こどもの存否を氣遣う疑念があった。懐疑、躊躇、不信、探りごころ——こういう寒雲の翳は、冥通の取持つ善鬼たちが特に働きを鈍らす妨げのものであった。この翳が心路の妨げをなすことはただ人同志の間にもあることである。危む相手にまごころをば俄にはうち出しにくい。

翁は謙遜な人であった。たとえ長寿を保つことに自在を得ているにしろ、翁は人並を欲した。翁はこの時代の人寿のほどを慮っておよそこれに倣おうとした。その目安をもって計るに、もはやわが期すべき死は生き行きつつあるいまの日よりだ

いぶ前に過ぎ越している。翁は苦笑しながら直ちにも雲を変じ巖に化しても大事なとは思った。しかし人間に居し人情を湛えた生涯を尽す最後の思い出にはどうか東国に送った二人のこどもの身の上を見定めてからのことにしたいと考えた。すでに死を期しては月色に冴えまさり行く翁の心丹に一ひら未練の情がうす紅色に冴え残った。翁は意識にこれを認めると、ぼたりぼたりと涙を零した。

翁は、螺の腹にえび蔓の背をしたまま旅の餉を背負い、杖を手にして東路に向った。妻は早く死に、陽のさす暖い山ふところの香高い橘の木の根方に泰らかに葬ってある。もはやうしろ髪ひかるる思いのものは西国には何ものも無かった。

鶏が鳴いて東の国の夜は開けかけた。翁はきょうこそ見ゆれと旅路の草の衾から起上がった。きょうもまた漠々たる雲の幕は空から地平に厚く垂れ下り、行く手の陸の見晴しを妨げた。風は※々たる海面から吹き上げて来て空の中で鳴った。風の仕業か雲の垂幕は無数の渦を絡み合せながら全体として、しずかにしずかに、東の方へ吹き移されて行く。いくら吹き移されても雲の垂幕は西のあとから手繰られて出た。翁は目あての山の一つが見える筈の東国へ足を踏み入れてから毎日この雲の垂幕に向って歩んでいる。山の祖神の翁はその冥通の力をもつて、これはこの山は物惜しみする中年女の山なのではあるまいかと察した。また恥かしがりやの生娘の山なのではあるまいかとも思った。西国の山にかけては冥通自在な翁も、東国へ足を踏み入れ東国の山に対するとき、つい不勝手な気がしてその冥通の働きをためらわした。そこに判断を二互らす障りがあった。

季節は初冬に入っていた。旅寝の衣には露霜が置いていた。翁は湿り気をふるって起上った。僅かに残っている白い鬢髪からも、長く垂れた白い眉尖からも雫が落ちた。雨風に曝され見すばらしくなった旅の翁をどこでも泊めようとしなかったのだ。翁は煩わしく雫を払いながら朝餉を少し食べた。持ち互って来た行糧ももはやほとんど無くなっていった。翁は朝餉を食べ終ると冷えた身体を撫でさすりいささかの暖味に心を引立たして貰って、きょうの旅路の踏出しにかかった。

鶏はおちこちで鳴き盛って来たが、行く手の垂

れ雲は晴れようとしなかった。捲き返す浪打際
のいさごを踏んで翁はとぼとぼと辿って行った。
海上の霧のうすれの明るみに松の生え並ぶ白州の
浜が覗かれた。翁は島かとも見るうちにまた霧に
隠れた。

その日の夕近く、翁は垂れ雲を左手にした、垂
れ雲の幕の面を平行する行路の上を辿るようにな
った。落日の華やかさもなく、けさがたからの風
は蕭々と一日じゅう吹き続けたまま暮れて行くの
であるが、翁には心なしか、左手の垂れ雲の幕の
裾が一二尺掠り除れて行くように思われた。あた
りが闇に入る前に、翁はその幕の掠り除れた横さ
まの隙より山の麓らしい大よな勾配を認めたと
うに思った。

草枕、旅の露宿に加えて、夢も皺かく老の身ゆ
えに、寝覚めがちな一夜であるのはもつともこの
とだが、この夜は別けて翁をして寝付かれしめぬ
ものがあつた。翁は興奮に駆られて自ら喜びをた
しなめる下からまた盛り上る喜びにうたた反側し
ながら呟いた。

「山近し、山近し」

あくる日は翁は一日歩いて、また一二尺掠り除
かれた雲の裾から山の麓を、より確かに覗き取っ
たが、歩めども歩めども山の麓の幅の尽きらしい
目度を計ることができなかつた。

年寄の歩みはたどたどしいにしても翁は次いで
三日も歩んだ麓の幅を計ることはできなかつた。

これはひよつとしたらいくつかの山の麓が重り
合っているのではないかと翁は疑つた。でなけれ
ば、麓の丸の縁に取り付いてぐるぐる廻りをして
いるのではあるまいかとも思つた。

雲の裾は、今度は数間の丈けに掠り除られ、そ
のまま止まって少しも動かなくなつた。その拵ご
りの隙より、今や見る土量の幅は天幅を開いて蒼
穹は僅かに土量の両鱗に於てのみ覗くを許してい
る土の巨台に逢着した。翁は呆れた。これが普通
いう山の麓であることか、おほらおほら。

翁は、慄えながら行き合せた野の人に訊ねた。
そして、山は福慈岳、います神は福慈神というの
であると教えられた。

たそがれは天地に立籠め、もの皆は水のいろに
漂いはじめたが、ただ一つ漂わされぬものがあつ

て山ふもとの薄明りの野に、一点の朱を留めてい
た。それは庭の祭りのかがり火であつた。神楽の
音も聞えて来る。

かがり火は、薪木の性と見え、時折、ぶちばち
と撥ね、不平そうに火勢をよじりうねらす、寂
莫たる天地は何の攪き乱さるる様子もなく、天地
創つてこのかた、たそがれちようものの待つ、そ
れは眠るにも非ず覚めたるにも非ざる中間に於て
悠久なるものを情緒に於て捉えようとするかれ持
前の思惟の仕方を續けている。水のいろをかがり
火のまわりに浸して静に囲んでいる。

かがり火も張合いがなく、まもなく火勢をもと
の蕊立ちの形に引伸し焰の末だけ、とよとよとよ
とよと呟かしている。神楽の音が聞えて来る。

晩秋の夕の露氣に龜縮んだ山の祖神の老翁は、
せめてこのかがり火に近寄つてあたりたかつたが、
それは許されないことである。今宵のこの庭のか
がり火は純粹な神のみが使う資格のある聖なる祭
の火であつた。一点の人情をつけて恋々西国より
東国へ娘の生い立ちにを見に下つた螺の如き腹に
えび蔓のような背をした老翁は、たとえ自然には
冥通ある超人には違いないが、なお純粹の神とは
いわれなかつた。生きとし生けるものの中では資
格に於ていわば半人半神の座に置かるべきもので
あつた。

娘の福慈の神もそれをいい、純粹の神の氣を享
けて神の領から今年、神がはじめてなりいでさせ
給うた神のなりものによつて純粹の神を餐まつる
ことのよしを仲立に、一元に敏く貫くいのちの力
により物心両様の中核を一つに披いて、神の世界
をまさしく地上に見ようとする純粹にも純粹を要
する今宵の祭に、鶏の毛ほどでもこと人の氣のあ
る生けるものは、たとえ親でも遠慮して欲しいと
いつた。娘の神が神としていちばん大事な修業を
する間、少しでも娘の氣を散らさないよう、爪の
垢ほどの穢れを持来さしめぬよう心懸けて呉れる
のがほんとの親子の情だといつた。

山の祖神は、山の裾野へさしかかつて四日目に
もう一日歩いて、たそがれ、かがり火を認めてた
ずね寄つたのではあつたが――

東の国のまだ見ぬ山へ、神として住みつきもや
すると思い捨てた覚悟のもとに旅人に托けて送つ
た末の娘が、思い設けたより巨岳の山の女神とな
つて生い立ちなりわいつつあるのに、山の祖神は

首尾よくめぐり会ったには違いないが――

その夕は相憎とこの麓の里で新粟を初めて嘗むる祭の日であり、娘の神の館は祭の幄舎に宛てられていた。この祭には諱忌のあるものは配偶さえ戸外へ避けしめる例であった。生みの親の、その肉親の纏白の情は、殊に老後の思い出に遙々たずね当った稀なる歡びは心情の捻纏を一層に煩わしくしよう。娘の神は父の老翁に、こういう慮りから、宿は村里の誰かの家へ取ってあげますから、祭の今夜一夜だけは自分の家をば遠慮して欲しいと頼んだのであった。

翁のふる郷の西国の山々にも新粟を初めて嘗むる祭はあった。しかしかかる純粹と深刻さで執り行う祭を、修業としての心得を、翁は東国へ来て生い立った娘の神から始めて聞いた。

翁は娘の神が口にしたこと人という言葉をしきりに気にした。遙々尋ねて来た生みの親に向ってこと人だという。何という薄情な娘なのだろう。しかしわけを聞いてみればその道理もないことはない。ふる郷を立つときから紅色に萌し始めた人情の胸の中の未練のほむらは子の慕わしきにかき立てられ旅の憂さに揺り上げられ、ころ一面に燃え盛っている。福慈の神に出会い一目それをわが娘と知るや無我夢中になってしまつて、矢庭に掻き抱こうとした旅塵の掌で、危うく白妙の斎の衣を穢そうとして、娘に止められて気が付いたほどである。これからしてみれば、一夜の間は心を静め澄さねばならない女神の斎の筵にかかる動きゆらめくものが傍におることは親とはいえ娘の神の為めにならないことは判り切つた話だ。ならば娘の神のいう通り村里へ下つて娘の神のいい付けて呉れた誰かの家へ行つて泊つてもやり度い。だが翁にはそれはできなかった。

娘の神が自分をこと人といつたのは今夜の神聖に對し一夜だけのことにしていつたのであろうか、それとも幼くして遙な国へ思い捨てた父に對しての無情の恨みの根を今も深く持ち添えそれでいつたのであろうか、それが氣になつた。前の方の理由からならば一夜ぐらい離れていることはとかくに辛棒はしてもいい。しかし後の方の理由からとしたならばこれは卒爾には済まされんことだ。そうしたことは山の祖神として自分にわけも氣持もあつてしたこと、の解き開きを娘の神にとくと諾かして、根に持つ恨みを雪解の水に溶き流さすまで

はかの女の傍からは離れられない。そのことで今世の親子の縁は切られ度くない。そう思つてかさにかかつて翁の娘の神に詰め寄りなじりかかろうとする刹那に神樂の音が起り祭が始つてしまつた。本意なくも庭外まで退いたのであつたが。腹はむしゃくしゃすると同時に堪えぬなつかしさの痛み、悔いがないでよいことへの悔い――そういつたことでごちやごちやになつていた。せめて娘の姿の望まれるところではばらく心を宥めよう。それにしても子というものは、しばらく離れてめぐり会つた子というものは何と人間のような血の氣を神の胸にも逆上さすものであろう。これが大自然に對しては冥通自在を得た山の祖神ともいわれるもの、心行かよ。翁は庭のはずれの台のところに来て蹲りながら苦笑した。

台の傾斜からは麓の野を越して、たそがれの雲の帳が望まれた。上見ぬ鷺の翔らん天ぎわから地上へかけて雲の帳は相変らずかけ垂れていたが、深まり来るたそがれの色にあらがうように帳の色は明るく薄れ行きつつある。それにつれて帳の奥の福慈岳の姿はいまや山の祖神の前に全積を示しかけて来た。祖神の翁は片唾を呑んだ。

およそ山を見るほどのものの胸には山の高さに對して心積りというものがある筈である。見るほどのものはあらかじめの心積りの高さを率て実山に宛嵌め眺めるのであつた。実山の高さが見るものの心積りの高さかなりの相違があつても、全然見るものの心積りを根底から破却し去らない限り、そこに觀念なるものと実在なるものと比較し得られる棧はしがあつてその上に立ち見るものをして両端の距りを心測して愕きの妙味を味い得しめるよすががある。ここにもし実在が觀念と別な世界ほどの在りようで比較の棧はしを徹し去らるるときわれ等の心路は何によつて味覚に達すべき。かかるとき愕きもない平凡もない。強いていおうならば北斗南面して看るといふ唐ようの古語にでも表現を譲るより仕方はあるまい。

さて、山の祖神の老翁は、雲の帳に透く福慈岳の全積を、麓の方から目途を攀らして頂へと計つて行つた。麓の道を横に辿つてその幅によりこれは只事でないと感じ取つた翁の胸には、福慈岳の高さに就ても、その心積りに相当しんにゆうをかけたものを用意して行つた。翁はそれを目度に移して山の影を見上げて行つた。翁は息を胸に一ぱ

長なす黒髪を項うなじの中から分けて豊かに垂れ下げ、輪廓の正しい横顔は、無限なるものを想うのみ、邪よこしまなる想いなしといい放った皎潔な表情を保ちながら、しら雲の岫くもを出づる徐なる静けさで横に移って行く。清らかな斎いづきの衣は、鶴の羽づくろいしながら泉を渡るに似て爽かにも厳かである。

蛍光のような幽美な光りが女神の身体から照り放たれ、その光りの輪廓は女神の身体が進めば闇に取り残され、取残されては急いで、進む女神の身体に追いつく。

常陸ひたちの国の天羽槌雄神が作った倭文布しずりの帯だけが、ちらりと女神の腰に艶なる人界の色を彩る。

翁はわが子ながら神々しくも美しいと見て取るうち、女神の姿は過ぎた。

娘の神が捧げて過ぎた机代のものの中で、平手に盛った宇流志禰うりしねの白い色、本陀理ほんだりに入れたにしぼりの高い匂いが、自分に絶望しかけて凡欲の心に還りつつある翁の眼や鼻から餓えた腸にかぐわしく染みだした。

翁はから火を見ながらかさかさ乾いて亀縮かじかむ掌を摩り合わせて「娘が子というものは」と考えた。

「手頃の育て方をして置くものだ」と、これは口に出していった。

「あの娘は、あまり偉くなりすぎたよ」

口惜しさと悔いがぎざぎざと胸を噛んだ。

「あれじゃ、まるで取り付くしまもありはしない」ふと、翁にふる郷の西国の山と山神が懐しまれた。あれ等のものにはつんもりとした、ちようど愛の掌で撫で廻される手頃なものがある。それ等の山には背があれば必ず山隈や谷があった。そのようにこどもの山神たちにも秀でた性格の傍、叱りたしなめはするがそれによってまた憐れみがかかり懐き寄せられもする欠点なるものがあるのだったが。

この山の娘にはそれが無い。美しく偉いだけで親さえ親しめる隙が無さそうである。

「この娘を東国へ旅人の手に托たくけて送ったときの氣持に戻って、いっそ、この娘を思い捨てるか。それにしてもこれだけになったものを、あまりに惜しい気もする。第一、山神の眷属の中からこれ程の女神を出したことは、山の祖神としていかなる氣持の犠牲を払っても光栄とすべきではないか」そう思うまた下から、親ごころの無条件な氣持でもって「娘よ」と呼びかけても、かの女の雪膚

の如き玲瓏な性情に於て対象に立ち完全そのものの張り切り方で立ち向われて来るときの、こなたの恥さえ覚えるばかりの手持無沙汰を想像するとき、やはり到底、親子としては交際つきあい兼ねる女なのであるまいかと、懸念がすぐ起って来るのであった。

とつおいつ思いあぐねるうち、いよいよ無力の孩児がじとしての感じを自分に深めて来た老翁は、いまは何もかなぐり捨て、ひたすら娘に縋り付き度くなつた。それは福慈神に向って娘としてよりも母らしいものへの寄する情に近かった。偉れて立優っているこの女神に対しこの流れの方向の感情に心を任せるとき、却って氣持は自然に近いことを老翁は発見した。

女神が捧げものを徹して持ち帰る姿が望まれた。翁は堪られなくなつて声をかけた。

「娘よ。福慈神よ」

それは始めから哀訴の声音だった。

女神の片眉が潜められたが声は美しく徹つていった。

「あら、まだ、そこにいらつしやいますの。お寒いのに、なぜ、おとり申上げた村里の宿へお出でになりませんか」

翁は頑がん是ぜない子供が、てれながら駄々を捏ねるように、掌に拳を突き当てつつ俯向き勝ちにいった。

「寂しいんだよ」

「では、どうして差上げたらよろしいのでございましょう」

「どんな端っこでもいい、おまえの家へ泊めとくれよ」

翁の声は小さかったが強訴の響は籠かこっていた。

「おまえの居ると同じ屋の棟の下にいれば気が済むのだから、決して祭りの邪魔はしないのだから」それが、おさせ申上られないことは、お出でにすぐ申上げたではございませんか。無理を仰おほしやっては困りますわ」

娘の声は美しく徹つたまま、山が頂より麓へ土を揺り据えたように、どっしりとした重味が添わって来た。その氣勢に圧せられた翁は、却ってあらがう氣持を二つ弾のような言葉で、あと先立て続けに女神へ向けて放つた。

「情のこわい女だぞ」「何をまだ、この上、親を断つても修業の祭をしようというのだ。いやさ、

これほど出来上った山やおまえに何の力や性格を増し加えようというのだ、慾張り」

女神は、しばらく黙って父の翁のいう言葉の意味の在所を突き止めていたが、やがて溜息をついたのち、静にいった。

「結局、おとうさまは、山の祖神の癖にこの福慈神だけはお知りになっていないことに帰着いたしますわね。よろしゅうございます、暁の祭までにはまだ間の時刻もございます。お話をたしましよ」

「と、いって、ちよつと美しく目を瞑り考えを纏めているようだったが、こう語り出した。

「おとうさま、この福慈岳は火を背骨に岩を肋骨に、砂を肉に付けていて少しの間も苦悩と美しさと成長の働をば休めない大修業底の山なのでございますわ。見損じて下さいませな」

雨気が除かれたかして星が中天に燦めき出した。天空より以下巨大な三角形の影をもちて空間を阻み星が燦めきあえぬ部分こそ夜眠の福慈岳の姿である。頂の煙のみ覚めてその舌尖は淡く星の数十粒を舐っている。

「わたくしが」

と福慈の女神は静に言葉をついだ。女神の顔は氷花のように燦めき、自然のみが持つ救いのない非情と、奥底知れない泰らかさとが、女神の身体から狭霧のようにくゆり出す。

岳神が変貌して、そしてこういうふうに言い出すとき、その「わたくし」は、最早岳神みずからそのことを指すのではなかった。岳神が冥合しているところの山そのものを岳神の上で語らしめるその「わたくし」であった。

山の祖神はさすがに、それとすぐ感じ取り、啓示を聴く敬虔な態度で、両の掌を組み合せ、篝火越しに聴こうとする。組んだ指の二本だけ、組み堅め方を緩めて、ひよくひよく蠢めかしているのは、娘が何を言い出すことやらと、まだ、親振った軽蔑の念と好奇心と混ったものを山の祖神がいささか心に蓄えていることの現れと見れば見られる。

「わたくしが、わたくし自身を知ったということの誇らしさ、また、辛さ。それを何とお話したらよいでございましょう。判って頂ける言葉に苦しみます。ここでは、ただそれが、いのちを張り裂

くほどの想いのもので……而かも、たとえ、いのちが張り裂けようとて、心は狂いも、得死ぬことすら許されず、窮極の緊張の正気を続けさせられるという気持のものであるというぐらいいしか申上げられないのを残念に思います」

と言つて、女神は、ここで溜息を一つした、白い息が夜気に淡くにじんだ。

「わたくしが、物ごころついた時分からでも、この大地の上に、四たびほど、それはそれは永く冷たい歳月と、永く暖かい歳月が、代る代る見舞うたのであります」

冷たい時期の間は、鈍く寒い大気の中に、ありとあらゆるものは、端という端、尖という尖から、氷柱を涙のように垂らして黙り込んでいた。暖かい時期の間は、このわたりの林の中にもまめ桜が四季を通して咲き続け、三光鳥のギーツギーツという地鳴き一年じゅう絶間なかった。

「そして只今、この大地は、四度目に来た冷い時期の、そのまた中に幾たてもこまかく冷温のきざみのある、ちよつどその二つ目の寒さの峠を下り降った根方の陽気の続いている時期にあるのでございませぬ」

まめ桜はひと年の五月に一度咲き、同じその頃、三光鳥はこの裾野の麓へ来て鳴く。生けるものはこししばらく住み具合のよい釣合いのとれた時期の続きであるだろう。

「この大地は、島山になっております。蜻蛉の形をしたこの島山の胴のまん中に、岩と岩との幅広い断れ目の溝があつて、そのあらいから、わたくしは生い立たせられつつあるのを見出したのでした」

西の海を越えて、うねつて来た二つの大きな山の脈系、それは島山の胴の裂け目を界にして南北に分けられる。そのおのおのには、内側のものと外側のものとの脈帯の襞が違つている。それすら、複雑蟠纏を極めているのに、下より突き上げ上から展し重なるよう、十一の火山脈が縦横に走る。

かくて、この島山は、潮の海から蜻蛉型に島山の肩を出すのが出来たのであつた。重ね重ねの母胎の苦勞である。その上、重く堅い巖を火の力により劈き、山形にわたくしを積み上げさせたということは、仇おろそかのすきびに出来る仕事ではない。非情の自然が、自らその頑な固定性に飽いて、抗い出た自己嫌悪の旗印か、または非生の

自然に却って生けるものより以上の意志があつて、それを生けるものに告げようとする必死の象徴でもあるのであろうか。

あるべきもののある理由は、そのものになり切つたものにしてはじめて領けるほど、深刻なものであるのであつた。山一つさえその通り――

「まだそのときのわたくしは、きしやな細火を背骨にし、べよべよ撓るほどの溶岩を一重の肋骨として周りに持ち、島山の中央の断れ目から島地の上へ平たく膨れ上つただけの山でした」

世の中は、ただうとうとと、あま葛の甘さに感じられた。ただひとりぼっちが寂しかった。

幼い青春が見舞つた。「環境」と「誰」を感じた。突き上げて来た物恋うところ。自らによって他を焼き度く希う情熱をはじめて自分は感じた。

自分は眩暈がして裂けた。息を吹き返して気が付いたときに、自分は見る影もない姿に壊れていった。胸から嘔き流れて凝つた血が、岩となって二枚目の肋骨としてまわりに張つていた。

自分は泣く泣く砂礫を拾つて、裸骨へ根気よく肉と皮を覆うた。

しばらく、爽かで湛えた気持の世の中が見廻わせた。自分は第二の青春を感じた。

同じく物恋うるところ、それには、「疑い」と「恥かしさ」が、厚い殻となって冠つていた。それをしも押しのけて、自らによって他を焼き尽さう情熱、自分はまたしても眩暈がした。裂けた。息を吹き返して気が付いたときに、自分は醜い姿に壊れていった。けれども自分の胸から嘔き流れて凝つた血は、三枚目の肋骨となって、まわりに張つていた。自分は泣く泣く砂礫を拾つて裸骨へ根気よく砂礫の肉と皮を覆つた。

しばらく、物憂く、嫉たく、しかも陽気な世の中が自分に見えた。自分は娛しい中に胸迫るものを感じ続けて来た。

第三の青春を感じた。

同じく物恋うるところに変わりはないけれども、自分はそれにも増して、「知る」ということの懼ろしきとうれしさを始めて感じ出した。これほどに壊れても裂けても、また立上つて来る自分。蘇つては必死に美しさに盛返そうとするちから。これは一体何だろう。他と競いごころを起すこの自分。分は一体何だろう。自分を自分から離して、冷やかに眺めて捌き、深く自省に喰い入る痛痒い錐揉

みのような火の働き、その火の働きの尖は、物恋うるほど内へ内へと執拗く焼き入れて行き、絶望と希望とが膜一重となつて居る胸の底に触れたと思つたとき、自分はまた裂けた。蘇つて壊れた自分を観ると、そこにはまた第四の肋骨が出来上つていた。

自分はそれに砂礫の肉と皮をつけた。

しばらく、明暗が渦雲のように取り組む世の中に眺められる。自分を引き分けて、近くへ寄つてみれば、焼石、焼灰の醜い心と身体、それは自分ながら吐き捨ててしまひ度いようである。けれども、やつと取り纏めて、離れて眺めみれば、芙蓉のように美しく、「誰」を魅する力があるもののようにでもある。それにつれて、希望という虹がうつらうつら夢みられて来る。

美しくも力強い希望。だが果して、その希望を実現し得られる力が自分の中にあるのだろうか。その力としてありそうに思える火の背梁だけは確に逞しくなつて居る。

しかしまたこの大きな虹のような希望を捉えようと考へ出したことがおそれた想いのようでもあり、身体に激しい慄えが来る。かくてまたもや自分は裂けた。

「わたくしは只今、最初から数えて八枚目の肋骨まで出来ております。わたくしの身体の根は、この島山の北の海岸にひき、また南は遠い南の海の硫黄を吐く島までひいています。わたくしの身体の続きの上で同じく火を吐く幾つかの眷属。この島山に小さいながらも姿は等しい三十余の山々。それ等はみなわたくしを母のようにしております。わたくしに較ぶ山はございません。わたくしは確かに選ばれたという自覚を今更どう取り消しようもございません。それにつれて、幼ない競い心も除かれました。選ばれたということの孤独の寂しさ、また晴れがましき、責任の重苦しさと権利の娛しさ。

ですが、折角ここまで育ち上つたものに、またもや成長の破壊が来て、これからさき何度も死ぬような思いをするのはまだしものこと、女の身として、一度々々あの醜さになるのを自分の眼でまざまざと見なければならぬということ、考へてもぞつといたしますわ」

可哀そうに啞のような自然、それでいて、意志だけは持つている。その意志を人によって表現し

たがっている。一体、人というものは懶けもので、小楽をしたがる性分である。驚異を与えないでは動かない。この島山に住む人は、山のわたくし同様、驚異でいのちに傷目をつけられ、美しさにいのちの芽を牽出され、苦悩に扱かれて、希望へと伸び上がらせられなければならない。「わたくしは、それを人に伝えるために選ばれました。」

父よ。あなたが、山の神の眷属としてわたくしを、ただ眷属中での褒められ者として育つのを望んだ娘は、この福慈岳に籠れる選ばれた偉大なのちの中に緬い込められ、いまや天地大とも久遠劫来のものとなってしまいました。いまや娘はあなたの望まれる程度に程良くなることも、娘子として可愛らしくあることも出来ません。それはどんなにか悲しいことでしょうが、運命です。仕方ありません。おとうさま、あなたはもう一度娘を東国へ思い捨てた気持になって、わたくしを思い捨てて下さい。さあ、暁が白みかけました。わたくしは、暁の祭りにいそしまねばなりません。早く、取って差上げた村の宿屋へおいでになって、お寝って下さいまし。いつでもそうしておいでては身体にお毒ですわ。あしたは、もっとゆっくり、これに就てのお話も出来ましょうから」

「わしや、偉大なものへ生命を賭けることは大好きなのじゃよ。わしは最愛のこどもでそれをした。その愛別離苦の悲しみや壮烈な想いで、わしの腸はこんなに螺の貝のように捻じ巻いたのじゃないか」と山の祖神の翁は負けん気の声を振り立てていった。「だが、親子の縁は切り度くないもんじゃよ」

とその言葉の下から継り声で寄り戻した。「あなたは生みの親、わたくしのいのちの親は、このあめつちと、この島山の人々。もはやあなたとわたくしを継ぐとか切るとかいうせきは放れておりませぬ」と女神は淡々としていった。「あなたが、わたくしを思い捨てなさるほど、わたくしはあなたに親しい愛娘になりましょう。その反対に、あなたが一筋でも低い肉親の血をわたくしにおつなぎのつもりがあったら、それは却ってわたくしから遠ざかりなさることになるのです。お判りになりませんか」

「わしが、おまえを東国へ思い捨てた歳からいま娘になるまでの歳月を数えてみるのに、いくら山

の神々の歳月は人間の歳月と違うにしろ、数えて額が知れている。それを何十万年何百万年の生い立ちの話をするなんて、あんまり親をばかにし過ぎるぞ。……いくらこの山の座り幅が広いたって、三国か四国に互っているに過ぎまい。それを海山遠く取入れた話をするなんて、あんまり大袈裟だぞ。女の癖に」

山の祖神のこういうたしなめ方に対し福慈の女神はもう何ともいわなかった。

「おい、娘、何とかいわんかい」

と催促されてもうそ寒そうに袖の中に手を入れ合して立っているだけだった。

山の祖神は

「こいつ氷のように冷たいおなごじゃねえ」

といった。

「よし、きさまがそういう料簡なら、こつちにもこつちの料簡がある」

といい放った。

山の祖神の翁に、噓返るような怒りと愛惜の念、また、不如意の口惜しさ、老いて取残されるもの寂しさがこもごも胸に突き上げて来た。

翁はじつとしていられなくなつて廻された独楽のように身体のしん棒で立上った。娘をはたつと睨み、焦げつく声でいった。

「よし、こうなつたら、やぶれかぶれ。おれはきさまを詛ってやる。金輪際まで詛ってやる。今更、この期になつてびくつくまいぞ」

娘の冴えまさる美しい顔を見ると、その毒心もつい鈍るので翁は眼を娘から外らしながら声を身体中から振り絞るべく、身体を揉み揺り地団太踏みながら叫んだ。

「福慈の山、福慈の神、おまえは冷たい。骨の髄に浸みるまで冷たい。えい、冷たいままで勝手に、おれ、年がら年中冷たい雪を冠っておるのがいいのさ。草木も懐かぬ裸山でおれ。凍るものから、餌食を見出して来やがれ」

ぺっぺっぺつと唾を三度、庭に吐き去りかけたが、ふとそこに落ちていた小石の一つを拾って手早く懐に納め、

「ぎまを見よ。やあいやあい」

といって出て行った。

この山の祖神の福慈の神に対する呪詛の言葉を常陸風土記では、

汝所居山、生涯之極、冬夏雪霜、冷寒重襲、人

民不登、飲食勿奠者

という文字で叙している。またこれにより富士は常に白雪を頂き、寒巖の裸山になったのだ、と古常陸地方の伝説は構成している。

東国へ思い捨てたこともに邂逅う望みを、姉の福慈岳の女神に失望した山の祖神は、せめて弟に望みを果し度いものだと、なおも東の方を志して尋ね歩るき出した。姉に訊いたら、あるいは消息を知ったかも知れないが、薄情を怒るどさくさ紛れに、つい訊くのを忘れたのを今更残念に思うものの、取って返して訊き直すこともならない。山の祖神の翁は行き合う人に訊ねることを唯一の手がかりにしてひたすら東の方にある山を望んで足を運ばせた。

行糧の料はすでに尽き、衣類、履ものも旅の責苦に破れ損じた。この身なりで物乞うては餓を満たして行く旅の翁を誰も親切には教えて呉れなかった。

足柄の真間の小菅を踏み、箱根の嶺ろのにこ草をなつかしみ寝て相模へ出た。白波の立つ伊豆の海が見ゆる。相模嶺の小嶺を見過し、真砂為す余綾の浜を通り、岩崩のかげを行く。

東の国へ行くには二手の道があった。一つは山寄りの道を辿ると、一つは海を越えて廻って行く道とであった。

山寄りの道を行く方が山の岳神を探すに便利は多いようなものの、それ等の山は多く未開の山で、ちよつと人に訊いただけでも、山の主は、百足であるとか、猿であるとか、驚であるとか、気の利いた山の神ではなかった。これでは訪ねずとも判っている。翁は身に疲れも出たことなり、漸く舟人に頼み込み、舟の隅に乗せて貰って浪路を辿った。

海路は相模国三浦半島から、今の東京湾頭を横断して房総半島の湊へ渡るのが船筋だった。

土地不案内に加えて、右往左往した上、乗った船もここにはやてを除け、かしこに風ぎを待つという進み方なので山の祖神の翁の上に人間の歲月の半年以上は早くも経ってしまった。

夏麻挽く、海上瀉の、沖つ州に、船は停めむ、さ夜更けにけり。

しとしとと来た雨の夜泊の船中で、寝ねがてた苦の雫の音を聞いていると翁の胸はしきりに傷ん

だ。翁は拾って来た娘の家の庭の小石を懐から取出して船燈のかげで検めみる。普通の石とは違っている。

すべすべして赤く染った細長く固い石である。頭と尾は細く胴は張っている。背及び腹に鱗のよなものが附いている。魚の形と見られぬこともないが、より多く涙が結晶した形と見る方が生きて眼に映る石の形であった。それは福慈岳が噴き出した火山弾の一つであるのだった。

「娘が変っているだけに、庭の小石も変っていら」翁はそういって、なおも燈のかげで小石を捻っていた。

傷むところに、きらりと白銀の丸のような光りが刺した。

「おれはいま娘の涙を手に弄んでいるのではあるまいか」

すると、娘がいったことであのときは不服のあまり胸に受けつけなかった意味のことが、まざまざと暗んじ返されてくるのだった。

「庭の小石まで涙の形になってやがる。ひどい苦労は確にしたのだな」

それに凝りずに、娘はなおも苦労を迎えてそれを支えた成長の肋骨を増やす積りでいる。凍るほど冷く感じられたおんなだったが、執拗く逞しく激しい火の性を籠らしている。その現れのようにこの涙型の石が血の色に赤く染っていることよ。

石が尾鰭まで生やして、魚になっても生き上らぬいのちの執拗さを示している。娘が何度も青春を迎えるといった言葉が思い出される。

翁は掌の上に載せた火山弾にだんだん切ない重みを感じながら、その娘に対し氷にもなれというような呪詛をかけたことのおよそ見当違いでもあり、無慈悲な仕打ちであることが悔まれた。

今頃、娘はどうしているだろう。福慈岳には夏に入るので白雪でも頂いていやしくないか知らん。

翁はすこすこ小石をまた懐へ入れた。苦に当る雨音を聞きながら一夜を寝苦しく船中に明した。

房総半島に上り、翁は再び望多の峰ろの笹葉の露を分け進む身となった。葛飾の真間の磯辺から、武蔵野の小岫がほとり、入間路の大家が原、埼玉の津、廻って常陸の国に入った。

筑波嶺に、雪かも降らる、否諾かも、愛しき児等が、布乾さるかも

山の祖神は、平地に禿立してゐる紫色の山を望み、それは筑波という山であつて、それには人身の形をした山神が住んでゐることを聞き知つた。

その山は全山が森林で掩われて鬱蒼としていた。麓の方は樫の林であり、中腹へかかるとそれが樫の林に代る。頂に近いところは山毛櫨となつた。山の祖神の翁はまだ山に近付かないさきから山の林種はこれ等で装われていることを、陽に映ゆる山緑の色調で見て取つた。この様子の山なら草木の種類はまだ他にたくさん宿つてゐる筈だ。

「豊かな山だな」
翁は手を翳してほほ笑んだ。

山の頂は二つに岐れてゐた。尋常な円錐形の峯に対し、やや繊細く鋭い峯が配置よく並び立つてゐる。この方は背丈は他より抽んでゐるが翁には女性的に感じられる。翁はこの山には人身の岳神が住み守ると聞いたが、それにしたら、その岳神は結婚してゐて、恐らくその妻は良人より年長のいわゆる姉女房であるであらうと山占いをした。

東国の北部の平野は広がつた。茅草・尾花の布き靡く草の海の上に、櫟・榛の雑木林が長濤のようになら冠さつてゐた。榛の木は房玉のような青い実をつけかけ、風が吹くと触れ合つてかすかな音を立てた。丸く見渡せる晴れ空をしら雲が一日じゅうゆるく互つて過ぎた。

その山は北の方から南へ向けて走る大きな山脈の、脈端には違ひないのだが、繋がる脈絡の山系はあまりに低いので、広い野に突秃として擡げ出された独立の山塊にしか見えない。母体の山脈は、あとに退き、うすれ日に透け、またはむれ雲の間から薔薇色に山巒を刻んで展望図の背景を護つてゐた。

平野のどこからも眺められるその山は、朝は藍に、昼はよもぎ色に、夕は紫に色を変えた。山の祖神の翁は、夕の紫の山をいちばん愛した。

翁が、草の茵に座つて、しずかにその暮山を眺めやるとき、山のむらさきから、事実、ほのかで甘く、人に懐き寄る堇の花の白いを翁の嗅覚は感じた。

翁は眼を細めて

「山近し、山近し」

と呟いた。

その言葉は、翁が福慈神に近付くとき胸に叫んだと同じ言葉ではあるが、翁はただ呟いただけで山に急ぐころは無かつた。その山は急いで近寄らなければ様子が判らないというような山容ではなかつた。離れて眺めてゐるだけでも懐しみは通う山の姿、色合ひだつた。むしろ近付いたら却つて興奮めめしそうな懸念もある遠見のよさそうな媚態がこの山には少しあつた。

広野の中に刀禰の大河が流れてゐた。薦、水葱に根を護られながら、昼は咲き夜は恋宿という合歡の花の木が岸に並んで生えている。翁はこの茂みの下にしばらく憩つて、疲れを癒やして行こうと思つた。何に疲れたのか。もちろん旅の疲れもある。しかもっと大きいのは娘に対する疲れであつた。

福慈岳で女神の娘と訣れてから旅の中にすでに半歳以上は過ぎた。訣れは憤りと呪いを置土産にいで立つたものの、渡海の夜船の雨泊中に娘の家の庭から拾つて来た福慈岳の火山弾を取出してみて、それが涙痕の形をしており、魚の形をしており、また血の色をしてゐるところから福慈岳神としての娘の苦勞を察し、決意のほどもほぼ覗えた。それにつれて一時それなりに呵し去れたと思へた娘の主張が再び心情を襲うて来て、手脚の患い以上で翁を疲らすのであつた。

娘のいつたことは自然の意志としたならあまりに生きて情熱に過ぎてゐる。もちろん人間の考えだけであれだけの超越の霜は帯ばれない。娘はいのちということをつたがそれは自然と人間を合せて中から核心を取出したそのものをいうのである。翁は今までの生涯に生きとし生けるものの逃れず考へることは生活と幸福と生死ということであると思つてゐた。そしてこれ等のことは人間が山に冥通する力を得て二つの山の岳神となり得たとき総ては解決されるとまた思つてゐた。山の生活、山の幸福、そこに何一つ充ち足らぬものがあるか。命終せんとして雲に化し巖に化す。そこに生死を解脱して永世に存在を完うしようとする人間根本の欲望さえ遂げ得られるのではないか。

それに引代へ娘はいくたたびの生死を語り、その生死毎に苦惱と美への成長を語り、生活とも幸福ともいわない。強いてそれらしいものを娘の言葉の中から捕捉するなら娘がいつたいくたたびか

迎える辛くも新鮮な青春、かくて遂に老ゆることを知らずして苦しくも無限に華やぎ光るいのち。娘にしたらこれをこう生活とも幸福ともいうのだろうか。おう！

山と人間を冥通するところの力に座して世に経るを岳神という。岳神も神には神である。だがこの程の生き方を望もうとも経られようとも思わぬ。それは人界の理想というものに似ている。現実には遠く距るほど理想である。しかもあの娘はその遠く距るものを現実に享け生かそうとするものはなかるうか。

娘は祭の儀を説いて神の中なる神に相逢うといつた。

思えば思うほどひとり壁立万仞の高さに挺身して行こうとする娘の健気な姿が空中でまぼろしと浮び、娘の足掻く裳からはうら哀しい雫が翁の胸に滴って翁を苦しめた。

取り付きようもない娘の心にせめて親子の肉情を撃ぎ置き度い非情手段から、翁は呪いという逆手で娘の感情に自分を烙印したのだったが、必要以上に娘を傷けねばよいが。

「どうしたらいいだろうなあ」

山の祖神の翁は螺の如き腹と、えび蔓のように曲がった身体を岸の叢に靠せて、ぼんやりしていた。道々も至るところで富士の嶺は望まれたが見れば眼が刺されるようなので顧ってみなかった。

岸の叢の中には、それを着ものの紐につけると物を忘れることができるという萱草も生えていたが、翁はそれも摘まなかった。せめて悩んでいてやることに娘に対する理解の端くれになりそうに思えた。

前には刀禰の大河が溶漾と流れていた。上つ瀬には桜皮の舟に小窓を操り、藻臥の束鮒を漁ろうと、狭手網さしわたしている。下つ瀬には網代人が州の小屋に籠って網代に鱸のかかるのを待っている。

翁はときどき、ひよんなところで、ひよんな憩い方をしていると、苦笑して悩みつつある一人ぼっちの自分を見出すのであったが、なかなか腰は上げ悪かった。

東国のこのわたりの人は言葉や気は荒かったが、根は親切だった。餓えて憩っている老翁のために魚鳥の獲ものの剩ったのを持って来て呉れたり、菱の実や、黒慈姑を持って来て呉れたりした。雨

露を凌ぐ菰の小屋さえ建てて呉れた。

昼は咲き夜は恋宿という合歡の木の花も散ってしまった。翁は寂しくなった。翁がこの木の下にしばし疲れを安めるために憩うたのは、一つは、葉の茂みの軟かさにもあるのだろうが一つは微紅色をした房花に、少女として自分の膝元に育て上げていた時分の福慈の女神の可憐な瞳の面かげを見出していたのではあるまいか。ぱつと開いてしかも煙れるような女神の少女時代の瞳を、翁は娘の成長に伴う親の悩みに悩まされるほど想い懐しまれて来るのだった。

刀禰の流れは銀色を帯び、渡って来た、秋鳥も瀬の面に浮ぶようになった。筑波山の夕紫はあかあかとした落日に滴落の紅を増して来た。稲の花の匂いがする。

「山近し、山近し」

山の祖神の翁は今はい古るしになっているこの言葉を呟いた。そしてやおら立上った。その山は確に葉守の神もいそしみ護る豊饒な山に違いな。そしてまた、そこに鎮まる岳神も、嘗て姉の福慈の女神と共に、東国へ思い捨てたわが末の息子が成長したものであろうという予感に沁々とあ

る。それでいてなお急ぐところは湧き出でない。河口に湖のようになって入江の秋水に影を浸すその山の紫をもう一度眺め澄してから翁は山に近付いて行つた。

山麓の端山の千木たかする家へ山の祖神の翁は岳神を訪ねた。

一年は過ぎたが不思議とその日は翁が福慈岳の女神を訪ねたと同じ頃で、この辺の新粟を嘗むる祭の日であった。岳神の家は幄舎に宛てられていた。神楽の音が聞えて来る。

山の祖神の予感に違わず、この筑波の岳神は、自分の息子の末の弟だった。

しかし息子は、父親の神の遥々の訪れをそれと知るや、直ちに翁を家の中へ導き入れ、紹介させた。その妻もろとも下へも置かない歓待に取りかかった。そうしながら祭の儀も如才なく勤めた。

その妻は翁の山占い通り、いささか良人より年長で良人の岳神を引廻し気味だった。彼女はいつた。

「ふだん、どんなにか、お父上のことを二人して語り暮らしておりましたことでしょう。有難いこ

とですわ。これで親孝行をさして頂けますわ」

家の中のいちばんよい部屋を翁のために設けて呉れた。この山に生るものの肥えて豊なさまは部屋の中を見廻したただけでも翁にはすぐそれと知れた。

黒木の柱、梁、また壁板の美事さ、結んでいる葛蔓の逞しき、簀子の竹材の肉の厚さ、翁は見ただけでも目を悦ばした。敷ものの獣の皮の毛は厚く柔かだった。

壁の一侧に※机を置き、皿や高坏たかつまに、果ものや、乾肉がくさぐさに盛れてある。一甕の酒も備えてある。

狩の慰みにもと長押ながしに丸木弓と胡やなぐい※が用意された。〔木十巻、第百水准の百廿〕
〔たけかんむり、第百水准〕

息子の夫妻は朝夕の間候を怠らず、食事どきの食事はいつも饗宴のような手厚さであった。

息子夫妻のそつ、の無い歓待振りはまことに十二分の親孝行に違いなかった。普通にいえばこれで満足すべきであろう。だが父の祖神の翁には物足りないものがあつた。

息子夫妻が父の祖神の翁に顔を合すとき、大体話は山の生産の模様、山民の生活の状況、それ等を統たばねて行く岳神としての支配の有様、そのようなものであつた。それは誰が聴いても円満で見上げたものであつた。山民間に起つた面白そうな出来事を噂話のように喋つても呉れた。だが、それだけだった。

親子関係を離れて誰に向つても話せる筋合いの事柄ばかりである。折角、親子がたまにめぐり合うのは、もつと心情に食い込んだ、親子でなければできないという気持の話はないものか。人知れない苦勞というものが息子の岳神にはないのか、囁いて力付けて貰つたり、慰めて貰つたりしたい秘密性の話はないのか。

気を付けてみるのに、息子の岳神のこの公的な円満性は、妻に対してでもそうであつた。

夫妻は睦むつまじくて仲が良い。良人を引廻し気味に見える才女の姉女房も、良人を立てるところには立派に立てた。岳神の家としての事務の経営は少しの渋滞もなく夫妻共に呼吸は合っている。それでいて何となく夫妻の間に味がない、お人良しでしかも根がしっかり者の良人の岳神が少しにやにやしなから、

「働けそうな女なので、共稼ぎにはいいと思いま

してね、この奥地の八溝山やまぞの岳神の妹だったので貰つて来ましたのです。これでも求婚の競争者が相当ございましたね」

「この意味のようなことを話しかけると、妻は「まあまあ、そんなお話、どうでもいいじゃございませんか」

「それよりかまだ山の中でおとうさまがお見残しのところもございましょう。幸いよい天気でございますから、あなたご案内して差上げたら」

と、とかくに事物の歓待の方へ気を利かして行くのであつた。

翁の方からは何もいい出せなかつた。いい出せる義理合ひではないと翁は思っていた。すでに東国へ思い捨てた子である。それが自力でかかる豊饒な山の岳神ともなつていて呉れるのだから何もいうことはない。山の祖神としては、この分身によつて自分にも豊かさという性格を付け加え得られ、眷属けんぞくの繁栄を眼に見ることである。感謝すべきだ。

姉娘に対してはとかく恋々たる山の祖神の翁も弟の岳神に対してはどういうものかこの点は諦めがよかつた。

ただ一言この弟の岳神の口から聞かして貰い度いのは姉娘の福慈岳の女神の批評だつた。翁はそれを聞いて、もし悪罵あくばの声でも放つて呉れるなら不思議に牽かれる娘の女神への恋々の情を薄めてでも貰えるようにさへ感ずるのだった。

翁はここに於てはじめて姉娘に就いての口を切つた。

「来る道で、実は福慈岳へも寄つてみたよ」

弟の岳神は顔の色も動かさず

「それは何よりでございました。姉さんもお喜びでございましたでしょう」

「ところが生憎あいにくと祭の日だったのでね。泊めて貰うこともできなかつたよ」

翁はこういつて弟の岳神の顔を見た。弟は諾うなずいたが声はあっさりしていた。

「そりやお気の毒なことでもございました。あちらはこちらと違つて諸事、厳しいところもございましょう」

翁は焦いらだつように訊いた。

「おまえ等は、福慈とは交際つぎあっていないのかい」
すると弟の岳神は言訳らしく

「なにしろ自分の持山のことで忙しく、ついつい

ご無沙汰をしております」

そのとき岳神の妻が傍から、ちよつと口を入れた。

「前にはお姉さまのところへも、ときどき伺ってみましたのですが、ああいうお偉い方のことですから、すぐこつちに話の接穂つぎほが無くなってしまう場合も多く、それにああいうご勉強家のことですから、お邪魔しましても、何かお妨げするような気もいたしますので、ついついご無沙汰勝ちになつてしまつたのでございますわ」

それからちよつと間を置き、

「ずいぶん、普通の女の子とは變つていらつしやいますわね」

その言葉につれて良人の岳神も

「どういふものか、あの人の前へ出ると、威圧される気がするところから、つい心にもない肩肘の張り方をしてしまう。どうも姉弟ながらうち解けにくい」

と零こぼした。

山の祖神が息子夫妻から衷情を披瀝ひれきしたらしい言葉を聴いたのは、この姉娘に対する非難めく口振りを通してだけだつた。

山の祖神はこれを聴くと、息子夫妻と一しよになつて姉娘を非難したい気持などは微塵みじんもなくなつた。腹の中で、「この平凡な若夫婦に、何であるの福慈の女神のことなぞが判るものか」と想いながら、こういう言葉で姉娘に関する話は打切りにした。

「なに、あれで、なかなか女らしいところもあるんだよ」と。

この山は人間が昵なじみ易い山だつた。水無川みなのかを越えて山腹にかけ山民の部落があつた。石も多いがしかしそれに生え越して瑞々みずみずと茂つた、赤松、樅もみ、山毛櫨ぶなの林間を抜けて峯と峯との間の鞍部くらに出られた。そこはこのびのびとしていて展望も利いた。

二つに分れている峯にはどちらにも登れた。岳神の息子夫妻の象徴のように一方は普通の峯かたちで、一方はいくらか繊細きんさいで鋭く丈たけも高かつた。山の祖神の老いの足でも登れた。

東の国の平野が目の下に望まれた。その岸に寝た刀禰の川水がうねうねと白く光つて通つている。河口の湖のような入江。それから外海の波が青く光つている。

西北の方には山群が望まれて、翁の心を沸き立たした。も少し自分の齡が若かつたらこどもをあれ等の岳神に送るのにと思わしめた。山郡のどころどころに高い山が見えた。煙りを噴いてる山も望まれる。遠く福慈岳が翁の眼に悲しく附き纏まとう。奇妙な形をしたいろいろの巨きな岩、滝——女性の峯から戻つて来る道には、そういう目の慰みになるものもあつた。虫を捉えて食べるという苔、実の頭から四つの羽の苞つとが出ている寄生木の草、こういうものも翁には珍めづらしかつた。

息子の岳神は暇な暇な、父の祖神を山中に案内して見せて廻るうち、ある日、山ふところの日当りの小竹原を通りかかり、そこに二坪近くの丸さに、小竹之葉こささが剥むげ、赤土が露むき出ているのを見付けると、息子の岳神は指して笑いながらいつた。「猪が仔猪をつれて来て相撲すまつて遊ぶところですよ」赤土は何度か猪の蹄ひづめに蹴かかれたらしく、綿のように柔かに、ほかほか暖ぬるうであつた。

「なるほど、この辺は人里離れて、猪の遊ぶのに持つて来いだ」

翁はそういつて、傍の保与ほよ（寄生木）のついでいる山松を見上げた。その日は何心なくそれで過ぎた。

岳神の父親が滞在すると聞き付けて、配下の土民たちはところどころの産物を父の祖神に差上げて呉れと持つて来た。

加波山で獵れた鹿らしく鹿島の獵で採れた鰻あわび、新治にいばりの野で獵れた、鳴な、那珂の川でとれたという、蜆貝しじみ。中にははるばる西北の山奥でとれたのをまた貫ぬいに貫ぬつて来たといつて、牟射むさ佐妣さびという鳥だか、獣だか判らないものをお珍めづらしかうと贈りに来た。老衰を防ぐにはこれが第一だといつて武奈岐むなきを持つて来て呉れるものもある。

夜の奥の綾あやむしろは暖く、結燈台の油あぶら坏つぎに油はなみなみとしてゐる。

翁は衣食住の幸福といふことも考えないでいられなかつた。

それで常陸風土記によると一応はこうも事祝ことほいでやつた、

「人民集賀、飲食富豊、代々無絶、日々弥栄、千秋万歳、遊樂不窮」と。

しぐれ降る頃には、裳羽服もほきの津の上で少女男が往き集う歌垣うたがきが催もよほされた。

男列も、女列も、青褶あわひだの衣をつけ、紅の長紐ながひもを

垂れて歌いつ舞った。歌の終り目毎に袖を挙げて振った。それは翁の心に僅かに残っている若やぐものに触れた。

岳神の妻は、笑って冗談のようにして、「この中に、もし、お気に入りの娘でも見当りましたら、お身のまわりのお世話に侍かせましょう」といって呉れた。

しかし翁は寂しかった。
ある日、土民の一人が瓜うりわらべを拾って持って来て呉れた。それは猪の仔で、生れて六七月になる。筒形をしていて柔かい生毛の背筋に瓜のような堅縞が入っていた。それで瓜わらべと呼び慣わされていた。

「これはよいものを貰った。肉は親の猪より軟か
どうまいものです」
息子の岳神はそういって、父の祖神に食べさすように妻に命じた。

翁は、ういういしく不器用な形の獣の仔を見ると、何か心の喘ぎが止まるような気がした。とて
も殺して食べさせて貰う気なぞ出なかった。

「ちよつと待つて呉れ。これはそのままわしが
貰おう」

翁は、瓜わらべを抱えて戸外へ出た。瓜わらべはくねくね可憐な鳴声を立てて鼻面を翁の胸にこすりつけた。翁は何となく涙ぐんだ。

翁は螺の腹にえび蔓の背をした形で、瓜わらべを抱え、いつの間にか、いつぞや、息子の岳神に教えられた山ふところの猪の相撲場に來ていた。蹄で蹴鋤いた赤土はほかほかしている。

山の祖神は、あたりを見廻した。見ているものは保与ほよのついた山松ばかりだった。翁は相撲場の中へ入り瓜わらべを土の上へ抱き下した。

螺の腹にえび蔓の背の形をした老翁と、筒形の瓜わらべとは、猫が毬まりを弄ぶように、また、老牛が狼に食はまれるように、転びつ、倒れつ千態万状を尽して、戯れ狂った。初冬の風が吹いて満山の木が鳴った。翁は疲れ切つて満足した。瓜わらべにちよつと頬ずりして土に置いた。瓜わらべの和にじ毛から放つらしい松脂の匂いが翁の鼻に残った。

翁はしばらく息を入れていた。瓜わらべは小竹の中へ逃げ込みそうなので片手で押えた。

膝かがしらがちくちく痛痒い。翁が検めみると獣の蝨だにが五六びき禪はかまの上から取り付いていた。猪の相撲場の土には親猪が蝨を落して行つたのだった。

「こいつ」

といつて翁は、膝頭の蝨を、宝玉を拾うように大事に、一粒ずつ摘み取る。老いの残れる歯で噛み潰した。獣の血臭いにおいがして翁の唇の端から血の色がうすりにじんだ。満山の風がまた互る。

翁にはもう何の心もなくなつた。手を滑つた瓜わらべは逃れて小竹の茂みに走り込んだ。代りに親猪の怒れる顔を翁は保与ほよのついた山松の根方に見出した。

山の祖神の事である、山に棲めるほどのものを自由に操縦できないいわれはない。けれども、翁は、

「命終のとき」

といつて、従容とその親猪の牙にかけられて果てた。

初夏五月の頃、富士の嶺の雪が溶け始めるのに人間の形に穴があく部分がある。「富士の人型」といって駿南、駿西の農民は、ここに田園の営みを初める印とする。その人型は螺の腹をしえび蔓の背をした山の祖神の翁の姿に、似ている。いやそれにやや獣の形を加えたようでもある。

ここにまた筑波の山中に、涙明神という社がある。本体には富士の火山弾が祭つてある。

山の祖神おやのかみが没くなるとまもなく子が無いことを託かこつていた筑波の岳神夫妻の間にこれをきつかけに男女五人ほどのこどもができた。

風の便りに聞けば、山の眷属の西国の諸山にも急にこどもの出生の数を増したという。

老いたるは、いのちを自然に還して、その肥田から若きものの芽を芽出たしめるといふ。

生命の耕鋤順環の理が信ぜられた。

水無瀬女は、豊かな山に生れ、しかも最初に生れた総領娘なので、充分な手当と愛寵の中で育てられた。ふた親は常に女ひめにいつて聴した。「東国では、あなたが、あの偉大な山の祖おやのかみ神さまの一番の孫なのですよ」と。孫娘はおさな心に高い誇りを感じた。

ふた親は、なお、祖父の神の偉大さを語るにこ
ういう言葉を使った、「なにしろ、西国の山々はもちろんのこと、東国でも、福慈とか、この筑波とかいう名山には必ず、こどもをお遺しになり、

山を拓かすと共に、眷属の繁栄をお図りになつた方なのだから」と。

祖父の偉れた点を語ることは、また、その孫娘に偉れることを慫慂することでもあった。

ふた親は、自分たちのことに就ては「わたし達は、何とすることは無い平凡なものさ。けれども、山を拓くことにかけては、これでも人知れない苦勞はしたものだ」と。

女は、幼いときから、礼儀作法を仕込まれた。

女の嗜みになる遊芸の道も仕込まれた。しかし最も躑躅に重きを置かれたのは生活の調度の道だったことは、ふた親の性格からして見易き道理であった。麻野には麻を蒔き、蚕時には桑子を飼う。

——もし鯛が手に入ったら蒜と一しよにひしお酢にし即座の珍味に客に供する。もし小江の葦蟹を貰ったら辛塩を塗り白でついて塩にして永く貯えるの珍味とする。こういう才覚が母によって仕込まれた。女は歌垣に加わって歌舞する手並も人並以上に優れたが、それよりも、繭を口に含んで糸を紡ぎ出し、機糸の上を真櫛でもって掻き捌く伎倆の方が遙に群を抜いていた。

女は容貌も美しかったので、かかる才能と共に、輩下の部落の土民の間で褒めものにされた。ふた親にとつては自慢の総領娘となった。

ふた親にとつては姉に当り、自分にとつては伯母に当る駿河能国の福慈の女神のことについては、どういふものかふた親はあまり多くを語らなかつた。語るのを好まないようだった。強いて訊くと「あんな伯母さんのことを気にかけるものではないりません」「仔細あつて私たちは交際してはいません」「あれで、なかなか裏に裏のある女ですね」「あんな大きな山に住えば誰だって評判はよくないさ。いってみれば運のよい女さ」「私たちと違って苦勞知らずの女さ」「女のこととは何一つできないあれが、どうして評判がいいのだろう」まずは悪評に近い方だった。しかしそれでいて、人々がふた親の目の前で福慈岳と女神のことを褒めると、ふた親は女神は自分たちの姉であることを明して、新しい眷属であることを誇った。

水無瀬女は、ときどき山の峯の鞍部のところへ上つて、伯母の山を眺めた。煙霧こそ距つれ、その山は地平の群山を圧して、白く美しく秀でていた。

「やっばり、立派だわ、うらやましいわ」

と声に出して言った。そしてふた親はいかにあれ、女神がああ山の如きであるなら、どうか自分もあの伯母さんのようになり度いものだ、理想をかの山に置いた。

女にだんだんもの心がつき、比較によって自分と他とを評価する力が生れて、福慈岳の評判を聞いてみると、その秀でさ加減はあまりにも自分の資格とはかけ離れたものであった。積といい量といい形といい、もはや生れながらも及びつかない素質の異りがあると感じないわけには行かなかった。一つ山の眷属の女でどうしてこうも恵まれた方に違いがあるのだろうか。女は福慈岳を眺めて、美しさよりぬけぬけとすまし返っているような感じが眼につくようになった。

「お伯母さまが、なにもかにも眷属中の女の良ところのものは一人で持つてらしまつたのだわ」

うらやましさが嵩じて嫉みともなった。

「だから、あたしのような屑の女も、眷属中にできるのだわ」

そして、ふた親がとかく福慈岳に対して反感を持つような態度であるのは、平凡が非凡から受ける無形の圧迫から来るものであること、また、自分に山の祖神の嫡孫の気位を高く持たせ、それに相応わしい偉れた女に生い立たしめようとするのも、伯母に対するふた親の無意識の競争心から来るものであることを感付かないわけにはゆかなかつた。

「駄目々々。偉くなることなんて。あたしに、さつぱりそんな慾はなくなつてよ」

捨てるともなく誇りと励みに背中を向けかけると、ふた親が説く、山の祖神の偉さというものより部落の間の噂に遺っている山の祖神の偉からざる方面のことが女には懐しまれて来た。

祖父さまは山中の猪の相撲場で、猪の仔の爪わらべと遊び戯れているとき、猪の親に襲われ、牙にかかつてお果てなされた。祖父さまは娘の福慈の神のつれない待遇を恨まれ、娘の神に誼いをかいたのみか、執着は、峯のしら雪に消え痕ともなつて自形の人型をとどめられた。それは稚氣と、未練であるでもあろう。それゆえ、ふた親は自分に秘して語らない。しかし部落の土民たちがこれを語るときに現す、山の祖神に対する親しげな面貌よ。稚氣と未練に含まれて、そこに何かあるに

違いない。

女は年頃になった。相変らずこの界隈の褒めものの娘であり、ふた親の自慢娘ではあった。女はもはや山の鞍部へ上って伯母の山の姿を眺め見ることはせず、理想なるものを持たず、ただその日その日を甲斐々々しく働いた。雁金かりがねが寒く来鳴き、新治にんじの鳥羽の淡海も秋風に白浪立つ頃ともなれば、女は自分が先に立ち奴たちを率いて、裾わの田井に秋田を刈った。冬ごもり時しも、旨飯を水に醸みなし客を犒ねがう待酒の新酒の味はよろしかった。娘はどこからしても完璧の娘だった。待酒を醸む場合に、女はまずその最初の杯の一杯を、社やしろに斎いっき祭つてある涙石に捧げた。それは祖父の山の祖神が命終るとき持てりしものの唯一の遺身かたみの品とされていた。

年頃になって、完璧の娘で、それでいて女に男の縁は薄かった。異性にしていい寄る恰好かっこうをするものもあるが、それは単に年頃にかかる娘への愛想か、岳神の総領娘に対しての敬意を変貌させたようなもので、恰好だけに過ぎなかった。もとより女自身からは乗り出せない。そういう触手は龜かじ縮かんでいる。双親を通して申込まれる山々からの縁談も無いことはないのだが、ぜひ自分でなくてはと望むらしい熱意ある需めもととは受取れなかった。良山良家の年頃の娘でさえあれば、一応、口をかけて問合わされる在り来りのものに過ぎなかった。双親はまた、自分たちの眼からしてたいしたものに思い倣なしている娘を、滅多な縁談にやれないといい張った。相手の山や岳神を詮議して、とかくそれ等に不足を見付け出した。娘の婚期は遅れて来た。双親は負け惜しみもあり、なに、それなら、水無瀬は筑波の岳の跡取にして、次の代の筑波は女神、女族長でやらして行くといっている。

水無瀬は何となく生きて行くことにくさくさして来た。さほど醜くもなく、これだけ物事ができる自分が、せめて、どうして男の縁が薄いのだろうか。女が男に対する魅力とは、全然こういう資格や能力とは関係ないのか。それにつけても久振りに伯母の福慈の女神のことが思い較べられて来るのであった。

往來の道が拓けるにつれ、東国の西の方よりこの東国の北部の方へ入り込んで来る旅人が多くなつた。女はその人々の口からして伯母の女神のそ

の後の消息を少しづつ詳しく聴くことができた。「福慈の女神はだんだん若くなるようである」と旅人たちはいった。七つ八つの童女の容貌を持ち、ただその儘ままで身体は大きい。怒るときは、山腹にかみなり稲妻を起し満山は暗くなった。笑うときは峯の雪を日に輝して東海一帯の天地を朗なものにした。悲しむときは、鳴沢に小石が滑り落ちる音が止めどもなくしくしくと聞えて来る。

平野に雲の海があるとき、霞棚引けるとき、それ等を敷筵しきむしらにして、幽婉な寝姿が影となって望まれる。それは息もないようなしずかな寝姿であり、見る目憚はばらぬこどものように仰あおむき踏みはだかった無邪気な寝姿でもある。

しかも、女神の慧さとさと敏感さは年経る毎に加わるらしく、天象歳時の変異を逸早く丘麓の住民たちに予知さすことに長けて来た。従来、ただ天氣の变りを予知さすだけに、峯の頂の天に掲げ出した、笠なりの雲も、近頃では、その色を黑白の二つに分け、黒の笠雲の場合は風雨のある前兆とし、白い笠雲の場合は風ばかりの前兆としたようなこまかさとなつた。

幾人の神人や人間が、この女神に恋をしたことであるだろう。女神は一々、まじめに、その恋を求むる男たちに見向つたらしい。だが何人がこの女神の逞たくましい火の性、徹る氷の性に、また氷火相闘つ矛盾の性に承うけ応えられるものがあつたらう。彼等のあるものは火取り虫のように却つて羽を焼かれ、あるものは虫入り水晶の虫のように晶結させられてしまった。矛盾の性に見向われたものは、裂かれて二重の空骸となつた。それ等の空骸に向つて女神は、涙をぼたぼた垂しながら、撫なでさすうというが、誰もその意味を汲取つたものはない。ただ女神にそういわれて撫でさすられた空骸は、土に還ると共に、そこからはこけ桃のような花木、薊あざみのような花草が生えた。深山みやま榛まはの木この根方にうち倒れた、醜い空骸は、土に還ると共に、根方に寄生して、そこから穂のような花をさし出すおにくという植物になつた。

生けるものに失望したのか、それとも自分自身現実離れして行くのか、女神の姿は、住いの麓ふもとの館をはじめ地上ではだんだん見受け悪くなつた。空間に浮ぶ方が多くなつた。形よりも影、体よりも光り、姿よりも匂いで、人の見ゆる方が多くな

った。水にひたす影に於てこそ、もっとも女神の現身をみることができる。

見ぬ恋に憧れたあちこちの若い河神たちが、八人と集つて来た。彼等は思い思いの麓の野に土を掘り穿ち水を湛えた。水に映る女神の影を捉えようためである。たまたま女神は湛えた水の一つに姿をうつす。その場を張り守っていた河神は猶予なく姿を掴む。うたるる水の音のみ高く響いて、あとに残つたものは掌から肘に伝わる雫のみである。一とき聞くに堪えないような失望の呻き声が聞える。だが河神は肘の雫を啜つていう「私はこの女神のために諦めということを取失わされてしまった。消ゆるかに見えて、また立つ漣……」

岳麓にできた八つの湖、その一つ一つを見まもる八人の河神の若い瞳。その辛抱を試しみるように、湖面に、ときどきさざ波が立つ。

旅人たちの話を総合してみて、いちいち驚かれる伯母が持てるものである。水無瀬女は、また「お伯母さまが、なにかにも持つてらしてしまつたのだわ。眷属中の良いところのものを一人で」と託つたが、男のころまでかくも牽くといふことを聴くと、うらやましが嵩じてなつた嫉みは、更に毒を加えて燃えさせられ、激しい怒りとなつた。女は「お伯母さまが、なにかにも奪つてしまひなさいさるのだわ。あたしの分まで……」こよいい直さないわけにはゆかなかつた。女のころは、決闘目となつて来た。かにかくに自分は一度伯母に会い、この話らないでは措けないものをうちかけてみたい気持ちに、迫られた。

あのつんとすまし、ぬけぬけと白膚を天に聳え立たしている伯母の山が、これだけは拭えぬ心の染班のように雪消の形に残す。伯母にとつては父、自分にとつては祖父の執着未練な人型なるものを見度かつた。それを見ることによつて自分に一げん懐しまれる性格の祖神にも会えるような気がした。

母はやや古い、筑波の岳神の家では、働きもの水無瀬が主婦のような形になつていた。世間の男たちからは距てを構えられる女も、家の中の弟妹たちからは母よりも頼みとされ、親しまれた。彼等は外なぞから帰つて来ると、まず「姉さまは」と、探し求めた。

水無瀬はその弟妹の中の上の弟を語つて、三月の行糧を、山の窟に蓄えた。姉の確りしたところ

で、いつも気を引立てられていた勝気にも性の弱い弟は、この秘密で冒險な行旅を、姉の敢行力の庇に在つて、共々、行い味われたので、一も二もなく賛成した。

さしむかう鹿島の崎に霞たなびき初め、若草の妻たちが、麓の野に莪蒿摘みて煮る煙が立つ頃となつた。女は弟を伴つてひそかに旅立つた。うち拓けた常識の国から、未萌の神秘の国へ探り入る気ずつなきはあつたが――

甲斐々々しくとも足弱の女の旅のことである。女が駿河路にかかつたときには花後の櫓の空に、ほととぎす鳴きわたり、摺らずとも草あやめの色は、裳に露で染つた。

近づくにつれ、いよいよ驚かれるのは伯母の領く福慈岳の姿である。姪の女はただ圧倒された。これがわが肉体の繋りかよ。しかもこのものに向つて、争おうと蓄えて来た胸の中のものなぞは、あまりに卑小な感じがして、今更に恥入るばかりであつた。この儘に帰ろうか。それも本意ない。うち出して会おうとするには、すでに胸中見透されていく気がして逡巡された。願きかくるは伯母のまにまにである。そしてこつちは、ゆくりなく、漂泊う旅の路上で、ふと伯母に見出されたという形であらしめ度い。胸中いかに見透されていようと少くともこの形の態度なら超越の伯母に対し、初対面の姪むすめの恰好はつけられる。

水無瀬女は弟を伴つて福慈岳の麓の野をあちらこちらと彷徨つた。嘗て常陸の山に在つて旅人から聞いた話の、八つの湖に女神の姿を待ち侘ぶ河神たちの姿も眼の前に見た。河神たちの若い瞳は、陽炎を立てて軟く燃えているが、姿は骨立つて瘦せていた。冬はかくて瘦せ細り夏に雨を得て肉附くことを繰返しながら、瞳は一途にあえかなるものに向つて求めているのだと土民はいつた。女はその瞳の一つだも贏ち得たなら自分はどんなに幸福だろうと考えないわけにはゆかない。

恋い死の空骸から咲き出でたという花木、花草は、今を春と咲き出してた。高く抽き出でた花は菟つてまぼろしの雲と棚曳き魂魄を匂いの火気に溶かしている。林や竹藪の中に屈まる射干、春蘭のような花すら美しき遠つ世を夢みている。これをしも死から咲き出たものとしたなら、この花等は自らの花をも楽しく謳つていようである。

ぴんちよぴんちよ、たちからたちから。北から帰って来たという小鳥たちは身籠る季節まえのまだ見ぬ雄を慕うて、囀りを立てている。

麓の春の豪華を、未濃の裳にして福慈岳は巖かに、また莞爾として聳立っている。一たい伯母さんは幾つの性格を持ってゐるのか知らん。

晴れた日は全山を玲瓏と人の眼に突付けて、瑕もあらば、看よ、看よと、いつてるような度胸のよい山の姿である。曇った日は雪の帳深く垂れ籠めて、臆した上にも病的な女が、人嫌いし出したようである。

くさぐさの山の変化を見経ぐり、見分けながら、女はまだ伯母の女神の姿に遇わない。弓矢を提えて来た弟は、郷国の常陸には見受けない鳥獣を獵ってその珍しさに日の過ぐるのを忘れていたが、それも飽きていうようになった。

「伯母さんなんかに遇ったってつままないじゃないか、もう帰ろうよ」

部落の土民の間では、こういういい慣しがあった。「それはたぶん、女神が季節の変わり目で、夏の化粧をされてるからだろう。でなければ厠に上られてはこされてゐるからだろう」女神の化粧は自分で納得ゆくまで何遍でも仕代えさせられるので永い。女神の上厠は、はこそものよりも、うつらうつら物うち考えられるのでこれも永い。厠神の植山姫、水匠女も永く場を塞がれて手を焼くそうであるという。

若い瞳がうち看守る八つの湖、春を敷妙の床の花原。この間にところどころ溶岩で成れる洞穴があった。形よき穴には生けるものが住んでいた。形悪しきには死にかかっているものが住んでいた。彷徨いあぐねてこの洞穴の一つのまえを通りかかった水無瀬女は、穴の中から「口き声に混つてこ

【口き声】、新水準一159

うというのを聞いた。

「あの方は、いのち、いのちというが、ああ、いのちは、健康であるときにのみ有意義なのだ、この病める姿の醜さ。昼も夜もそのための尽きぬ嘆きに、ああ、わたしは、わたしに残れる僅かないのちの重味にさえ堪え兼ねている」

「この堪えられない程、烈しい息切れと、苦しい動悸のする身体。つくづく情無さを感ずる。呼吸を吸い込むと胸の中に枯枝か屑のようなものがつかえ、咽喉はいらいらと虫けらが這うように痒い。その不快さ。咳、濁って煤けた咳。六つも七つも

続けさまに出る。胸から咽喉へかけて意地悪い瘦せこけて骨張った手が捏ねくり廻しているようだ。辛い。わたしは顔をしかめる。思わず口を醜く開く。さぞ醜いさまだろう。この辛さ醜くさを続けてまで、いつまであの方はいのちを担って行けといわれるのだろうか」

「こんな痩せ細ってしまったって、この先どうするのだろう。私はともかくこうして二十七まで生きたんだから、もう死んでもいいのだと思うのだが。一日々々と醜く苦しませないで早く死なせて貰いたい。丈夫な時には、希望も、歡樂も、恋もあつたが、病氣になつてみれば何にもない。死ねばどうなるのか私はそれを知らない。病が苦しいから死のうと思うだけだ」

「蛙の声が穴の中まで聞えて来る。外は春なのだなあ。蛙よ、唄ってくれ唄ってくれ。私はお前の唄に聞き惚れつつ、さまざま思い出の中に眠るのが今はたった一つの楽しみなのだ。死というものの状態に似ているらしい眠りに就くことが……」その声は妙に水無瀬女の心に染みだ。この時代に在っては、およそ生きとし生けるもので、生こそは欲すれ、死を望むことはいかなる条件の代償を得るにもせよ心に無いことだった。従つてその声のいうところは女に珍らしかった。女は、ここにも女神のために出来た奇妙な怪我人が一人いるのかと、久振りに伯母に対する義憤を催して、弟はその辺の狩に出し遣り、自分は洞穴の中へ入つて行つた。

弟が用意して呉れた僅な松明の灯を掲げて、女は洞穴の中へ入つて行つた。齒朶が生い困んでいゝ入口の辺を過ぎると、岩窟の岩肌が灯に照し出された。頬を掠めて蝙蝠らしいものが飛んで女を驚した。

僅な松明の灯に照し出される岩肌は、穴の屈曲に従つて拗けた瘤をつけ、波打つ襞を重ねる。岩室がぼっかり袋のように広くなつたところもある。洞内の貫きよう、壁皺の模様、かてて加えて、岩徹る清水は岩の肌を程よく潤して洞は枯石の成るところのものとは思えない。女はなにかしら柔かくふによふによしたものの中を行くと思ひ做された。しかもそのなにかしらと感じていたものが、ふと生けるものの、女性の胎内とはかかるものではないかと思ひ浮べられて来たときに、女はわれ知らず、身体が熱くなり、顔の赭くなるの

を覚えた。

岩角を一つ曲ると、かすかな燈火の灯かげに照し出され、一人の若い男が、天井から垂れ下っている大きな乳房に吸い付いて余念もなく吸っている不恰好なさまを見出した。女はつい松明を取落し「あらっ！」と叫ばざるを得なかった。

この若い男は、科野国しののの獣神であって、福慈の女神により人間に化せしめられつつあるうち病氣をしてしまったのでこの洞窟内で療養せしめられているのだといった。

男の吸う乳房は、やはり岩瘤の一つで天井から垂れ下ったものであるが、尖には乳首の形もあつた。これに伝わって滴る雫は、靈晶の石を溶し来て白濁し、人間の母が胸から湧かすところの乳の雫そのままであつた。

若い獣神は「この乳を、あの方は、生に對しても根が尽き果て、さればといって死へも急げない、生けるものに取りつていちばん遣り切れないときに飲めと仰おつしゃるんです。そのときがいちばん利くと。でも、そういう場合に飲もうとする努力は苦しいものですわね」

若い獣神はしきりに咳き込んだ。水無瀬女は背を撫でて介抱してやった。

燈火のかすかな灯かげで女は獣神をよく見た。眼は落ち窪み、頬は瘦け削そげているが、やさしいたちの男らしかった。獣神にもこんな男がいるのか。女は眼を瞠まつた。ただ顔立ちに似気なく厚肉の唇は生の情慾なまに燃え血を塗つたようだった。男は荒い毛の獣の皮を着ていた。その衣の裾が岩床に敷くまわりに一ぱい痰たんが吐き捨ててあつた。その痰の斑には濃い緑色のところと、黄緑色のところと、粘り白いところとある。淡く白いののは唾らしく無数の泡を浮べていた。眉をひそめて、それを眺めていると見て、男はそれを指しながらいった。

「こいつ等が、咽喉にうにようによして停滞しているときは、全く無作法な獣たちですね。私はそれが邪魔だから吐き出す。だがその度びに私から獣としてのいのちは吐き出されて行き、そのあとに果して人間のいのちが私に盛り上って来るか判りやしません。いくらあの方が神仙の乳を飲まして下さったって……」

「いうことがどういうふうに女に響くか窺ぬす視したのち、

「ねえ、お嬢さん。それで私はこの憎らしい、私を苦しめる痰を、吐き出すときに、一々、舌の上に乗せて味ってやるんですよ。獣のいのちの名残りにしてそれには淡く塩辛いのもあり、いくらか甘くて——」

といいかけたとき、女は急いで袖を自分の鼻口に当て手を差し出して止めた。

「もういいもういい。話は判つてよ」

女は、この類たぐいで、この若き獣神が生きとし生けるものの醜悪の底の味いを愛惜し、嘗め潜つて来たであろうことを察して、悪寒おかんのある身慄いをした。と同時に不思議や龜縮かじかんでいた異性に対する本能の触手が制約の撻むちを放れてすくと差し延べられるのを感じた。

男は苦しく薄笑いしながら、

「じゃ、こんな話は止めにしましょう、だがね、お嬢さん、洞の外は、すっかり春でしょう。青々とした春でしょうねえ。うらやましいこつた」

といったときには、女はもうこの男の傍を離れ難くなつていた。女は、

「たとえ、この男が、伯母さんに失恋した、いわば伯母さんの剩りものにしたところで、いいや、あたしはこの男を得るかも知れない。あたしはもう伯母さんに嫉みも恨みもなくなつた。伯母さんにはまた伯母さんとしてのたくさんな担いものがあるらしいから」

胸にこう自問自答して、女は洞の中の男の傍に介抱すべくとどまつた。

山は晴れ、麓の富士桜は、咲きも残さず、散りも始めない一ぱいときである。洞から水を汲みに出た水無瀬女は、浅黄の空に、在りとしも思えず、無しと見れば泛ぶかの氣の姿の、伯母の福慈の女神に遇つた。

女神はころころと笑つた。

「水無瀬女よ、めぐし姪姫よ。山と岳神と二つになつて時代は去つた。しばらくは人を中心にあめつちは支えられる。ただし、神を享けぬ人は低からう、ただし獣の力を帯びない人は弱からう。看よ、看よ。わたしは山一つを人に遺して置く。山一つ。すべての訓えはこれにある。岳神のわたしは失うする。失することの楽しさ。失するということはある方の中に得ることである。あんたが悩むとき、美しくあるとき、青春に萌ゆるとき、

わたしは在る。ほんとうに在る。あんたの肉体そのものに感ぜられるまでに、わたしは在る。今ぞわたしは失する。さくらの空に朗々と失することの楽しさ」

またころころと笑う声は、珠うち鳴らしつつ距り行くが如く、霞を貫きお空の宙にまであとをひいていつとしもなく聞えなくなった。福慈の岳の噴煙は激しくなつて、鳴動をはじめた。

不二の嶺のいや遠長き山路をも妹許訪へば氣に呻はず来ぬ

富士の西南の麓、今日、大宮町浅間神社の境内にある湧玉池と呼ばれる湛えた水のほとり、一人の若い女が、一人の若い男に出会った。

頃は、駿河国という名称はなくて、富士川辺まで佐賀牟国と呼ばれていた時代のことである。

若い男は武装して弓矢を持っている。若い女は玉など頸にかけ古びてはいるがちよつとした外出着である。若い男は女をみると、一時立竝むように佇り、まさ眼には見られないが、しかし身体中から何かを吸出されるように、見ないわけにはゆかないといった。

女は、自分の前に佇った男は、身体の割に、手足が長くて、むくつけき中に逞しさを蔵している。獣のように毛深い。嫌だなどと思うほど、女を撃ち融かす分量のものをもっている。女は生れ付きの女の防禦心から眼をわきへ外らした。しかし身体だけは、ちよつと腰を前横へ押出して僅かなしなを見せた。池のほとりの桔梗の花の荅をまさぐる。しばらく虚々実々、無言にして、天体の日月星辰を運行の中に、新生の惑星が新しく軌道を探すと同じ叡智が二人の中に駈け廻った。

やがて男は、女の機嫌を取るように、ぎごちなく一礼した。

女も、一礼した。

今度は、男は眼に熱情を籠めて、じーっと見入った。女は下態はそのまま、上態は七分通り水の方へ振り向け、ふくふく水溜りの底から浮く、泡の湧玉を眺めている。手は所在なきように、摘み取った桔梗の枝の荅で、群る渚の秋花を軽くうっている。

男の心の中に、表現し得ずして表現し度い必死

の気持が、齒噛みをした。

事実、男の齒はぱりぱりと鳴った。

男は切なく叫ぶ、

「この大根、嫁かずであれ、——今に」

といい、あとをも見ずに駈け去った。その走り方は、不器用な中に鳥獣のような俊敏さがあった。女は、きゅつきゅつと上態を屈めて笑った。男が精一杯のやけ力を出して自分をこの蕪野な蔬菜に譬えたのがおかしかった。

女は笑いながら、しかし拵えたものでなく、自然に、このことをおかしみ笑える自分を、男に見せられなかつたのを残念に思った。そこにすでに男の虚勢を見透し、見透すがゆえに、余裕綽々とした自分であることを男に示したかった。その余裕から一層男を焦らせて、牽付け度い女の持前の罪な罠もあろう。

笑ったあとで、女は富士を見上げた。はつ秋の空にしんと静もり返っている。山は自分の気持の底を見抜いていて、それはたいしたことはない、しかしいまの年頃では真面目にやるがよいといっているようでもある。

高い峯を起して、鳥が渡って行く。次に次に。それは水溜りの泡の湧玉のように無限に尽きない。絶頂をわざわざ越す鳥は純な鷺だけだといわれているが、あの鳥はそうなのか。

女は、

「ばかにしている」

といって、つまらなさそうに、桔梗の荅の枝を水溜りに投込んだ。落魄れた館へ帰って行った、二三日経って女はまた湧玉の水のほとりで、男と会った。男は、手頃に傷けてまだ息を残さしてある雄鹿を小脇に抱えていた。女を見出すと、片息の鹿を女の足元に抛り出した。それから身体中が辛痒ゆい毒の齒に噛まれでもするようにくねらせた。眼から鉾を突出すよう女を見入った。

女は思慮分別も融けるような男の息吹きを身体に感じた。しかし前回での男とのめぐり合いのうち、富士を眺め上げて、それはただ血の気の做すわざなんだか、もつと深く喰入るべきものがあるような気がしたのを想い出して、自然と抑止するものがあつた。

「どうなしたの」

とすすろのように訊いた。女は足元に投出された血だらけの矢の雄鹿を見ても愕かず、少しわき

へ寄っただけであった。男の何かしら廻り諍い所作の道具に使われて、命を失いかけている小雄鹿を、その男と共に、無駄なことの犠牲になった悲運のものと思うだけだった。ただ、しゆくしゆく鳴きながら苦しみを訴える鹿の眼の懸命に戸惑う瞳の閃きに一点の偽りもないのを見ると掻き抱いてやり度いようだった。

男は口を二三度もぐもぐさしたが、やはりいい出せなかった。女の方が却って男の不器用を察して気づつない思いを紛らすために、わきを向きながら小さな声で唄った

など ささ ささ とめ
 とめ とめ とめ
など ささ ささ とめ
 とめ とめ とめ

これは、男の顔を、ちらと見たとき、自然と思ひ浮べられた歌の文句だった。

このはじかみ、ひび

男は、叫ぶと猛然、女の代りに鹿に飛びかかって、毛深く逞しい拳を振り上げて、丁々と撃つた。

すでに傷き片息になつて毛ものごととて、
※くまもなく四肢をくいくいと伸して息絶えた。

なべてものの死というものの、何かおかしみがありながら頭を下げずにはいられない神秘を女は見透した。

「なんて、可哀相なことをなさるの」

女は務めのようにそういった。

男は、夢中で狂気染みた沙汰を醒めて冷く指摘されたように、口銜り、みると額に冷汗までかいている。「この大根、嫁かずであれ、——今に」
そういうかと思うと、たちまち、男はまた、不器用にも俊敏に去った。

女は、何となく本意なく、富士の高嶺を見上げた。その姿は、いま眼のまえに横っている小雄鹿の死と同じ静謐さをもって、聳えて揺り据っている。今日も鳥が渡っている。

男はそのかみ、神武御東征のとき、偽者土蜘蛛と呼ばれ、来目の子等によって征服されて帰順した、一党の裔であった。その祖先は天富命が裔部の諸氏を従え、沃壤地を求き、遙に、東国の安房地に拓務を図つたのに、加えられて、東国に來り住んだ。種族の血を享けてか、情熱と肉体の逞しさだけあって、智慧は足りない方だった。彼は強いままに当時の上司の命を受けて、東国の界隈の土蜘蛛の残りの裔を討伐に向つた。たまたまこ

の佐賀牟の国の富士の山麓まで遠征した。

一方女は水無瀬女と獸の神の若者との間から生れ出て多くの門裔がこの麓の地に蔓つたその宗家の娘であった。祖先の水無瀬女から何代か数知れぬ継承の間に、宗家は衰え派出した分家、また分家の方が栄えた。どういいうわけであろう。界隈の昇華した名家々の流れを相互に婚姻を交えている間に、家の人間に土より生い立てる本能の慾望を欠き、夢以外に食慾が持てない咀嚼力の精神になつてしまったのも原因の一つであろう。この女も人情のことは何でも判っていて、あまり判り過ぎるが故に、男に興味が持てなくなつたという側の女となつてしまつていた。

ところがこの頃、湧玉の水のほとりで、度び度び遇う男は、女の醒めたものを攪乱する野太く、血熱いものを持つている。下品で嫌だなど思いなから、無ければ寂しい気がする。そして興味を牽いて救われるのは、その男が啞者のように表現の途を得ないで、いろいろに感情の内爆や側爆のこいう所作をすることである。

それから後も、男は、得意の弓矢の業をもって、麓に住む荒い獸を半殺しの程度にして狩り取り、湧玉の水のほとりに待受けていて、女を見ると、屠り殺した。

小牛ほどの熊を引ずつて来て、それに掌で搏たれ、爪で搔れながら彼は、組打ち、小剣で腹を截り裂いた。截り裂くと同時に、彼は顔をぐわと、腹の腑の中に埋めた。血潮が逆る。彼は頭を腑中に挟じていたが、すぐ包もののような塊を銜え出した。顔中のみか鬚髪まで血みどろになつて恐ろしく異様な生ものに見えたと銜えた包もののような塊からも繋る腑の紐からも黒いほどの獸の血が滴った。彼はそうしながら、しよんぼりとして女の前に立つ。これはなんのつもりだろう。すると、不思議に、女は顔蒼ざめさせ体は慄えながら一種の酔心地とならざるを得なかつた。生れて始めて力というものが身の中に育まれるのを感じた。

だが女はこの気持を通しての、酔えるままにこの男と融け合つたならどういいうところへ行くであろうと危く思う。

女は、そ知らぬ顔をして富士を見上げた。碧い空をうす紫に抽き上げている山の峯の上に相変らず鳥が渡っている。奥深くも静な秋の大山。

女は、所詮、どっちかからいい出さねばならな

い羽目が近付いているのを悟った。母親も気付いて相手の身分を図り近頃はぐずぐずいう。しかしこの情熱を生そのままでは、たとえこのまま二人は結ばれたにしろ、のちのあくどさが思い遣られる。その日はやはり「この大根、嫁かすであれ、——今に」といつて駆去った男が、その翌日、何にも黙は持たずに水のほとりに来た。女を見ると、矢庭に弓矢を女に向けて張った。男はこの頃の興奮と思ひ悩みに、いたく痩せ衰え、逞しい胸で息せき切っている。かくしてもまだ口ではいい出せず、弓矢をもって代弁させなければならぬ、荒い男の高ぶった憶しごころを女ははじめて憐れとみた。

女は、手で止め、ふと思ひ付き

「朝な朝なこの水に湧く、湧く玉の数を、数え尽しなさらば」

寂しく笑いながらいった。男は弓矢をそこに抛り出し、ぐずぐずと水のほとりに坐した。

富士が生ける証拠に、その鼓動、脈搏を形に於て示すものはたくさんあるが、この湧玉の水もその一つであった。朝日がひむがしの海より出で、山の小額を薔薇色に染めかけるとき、この水の底から湧く泡の玉は特に数が多い。夜中に籠れる歌気を吐くのであろうか、夜中に凝る乳を粒立たすのであるうか、とにかく、この湧玉をみて、そして峯を仰ぐとき、確に山の眼覚めを思わせる。泡の玉は暗い水底より早味そのもの色である浅黄色の中に、粒白の玉として生れ出で、途中真珠の色に染め做されつつ浮き泡となり水面に踊って散り失す。あなやの間ではあるが、消えてはまた生まれ、あちらと思えばこちら、連続と隠顕と、ひととき眼を忙失させるけれども、なお眼を放たないなら、眺め入るものに有限の意識を泡にして、何か永遠に通じさすところがある。ふつつつ、ふつつつ。仰げばすでに、はつきり覚めて、朝化粧、振威の肩を朝風に弄らせている大空の富士は真の青春を味うものの落着いた微笑を啓示している。

男は今度、女が来たとき

「数は数え終えたよ」と微笑した。

しかし、女はなお、男を試みて

「夕な夕な山を越して来る、鳥の数を数えなさら」といった。

男は秋の夕山を仰いで、渡り来る鳥群に眼をつけた。

陽が西に沈むにつれ山は裾から濃紫に染め上って行く、華やかにも寂しい背光に、みるみる山は張りを弛めて、黒ずみ眠って行く。なお残る茜の空に一むれ過ぎて、また一むれ粉末のまだら。無関心の高い峯の上を、その鳥群のまだらだけが愛を湛えて、哀しい大空にあたたかい味を運んで行く。

今度女が来たとき男はいった。

「あの山を越す哀しい鳥の数も数え尽した」

「もう、いいわ、じゃ、ね」

さぬらくは玉の緒ばかり恋ふらくは不二の高嶺の鳴沢のごと

駿河の海磯辺に生ふる浜つづら汝をたのみ母にたがひぬ

底本…「岡本かの子全集6」ちくま文庫、筑摩書房

1993（平成5）年9月22日第1刷発行

親本…「岡本かの子全集」冬樹社

入力…穂井田卓志

校正…高橋由宜

1999年10月14日公開

2004年1月10日修正

青空文庫作成ファイル…

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。